

国語科学習指導案

八尾市立八尾小学校
指導者 虎杖 睦宜

1. 日 時 令和6年11月22日 第5時限 14:00~14:45
2. 場 所 第3年2組教室
3. 学年・組 第3学年2組(37名)
4. 単 元 名 「すがたをかえる〇〇を書こう」
教材文:「すがたをかえる大豆」国分 牧衛(光村図書)

5. 単元目標

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
<p>・比較や分類のしかた、辞書の使い方を理解し使うことができる。【(2)イ】</p> <p>・幅広く読書に親しみ、読書が必要な知識や情報を得ることに役立つことに気づくことができる。【(3)オ】</p>	<p>・自分の考えとそれを支える理由や事例との関係などについて、叙述を基に捉えることができる。【B書くこと(1)ウ】</p> <p>・段落相互の関係に着目しながら、考えとそれを支える理由や事例との関係などについて、叙述を基に捉えることができる。 【C読むこと(1)ア】</p> <p>・文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつことができる【C読むこと(1)オ】</p>	<p>・言葉が持つよさに気づくとともに、幅広く読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。</p>

6. 本単元で取り組む言語活動

「すがたをかえる〇〇」を書こう

7. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>①比較や分類のしかた、辞書の使い方を理解し使おうとしている。【(2)イ】</p> <p>②幅広く読書に親しみ、読書が必要な知識や情報を得ることに役立つことに気づいている。【(3)オ】</p>	<p>①「書くこと」において、自分の考えとそれを支える理由や事例との関係などについて、叙述を基に捉えている。 【B書くこと(1)ウ】</p> <p>②「読むこと」において、段落相互の関係に着目しながら、考えとそれを支える理由</p>	<p>①積極的に説明されている内容とそれを支える事例との関係について叙述を基に捉えたり、それらを明確にして書き表し方を工夫したりしようとし、学習の見通しをもって、文章の説明の工夫を見つけてそれをいかして書こうとしている。</p>

	や事例との関係などについて、叙述を基に捉えている。 【C読むこと(1)ア】 ③文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもっている。【C読むこと(1)オ】	
--	--	--

8. 指導にあたって

(1)児童観

本学級の児童は、第二学年において順序を表す言葉に着目しながら説明文を学習してきた。これまでに、第二学年で学んだ説明文は、「たんぽぽのちえ」、「どうぶつ園のじゅうい」、「馬のおもちゃの作り方」、「おにごっこ」の四つである。

「たんぽぽのちえ」では、文章を入れ替えると説明が成り立たないといった「順序」の大切さを学習してきた。言語活動では、「〇〇のちえ」を書き、それをもとに発表会を行った。

「どうぶつ園のじゅうい」では、動物園の獣医の1日の仕事について日記のように書かれており、時間的な順序を捉える学習をしてきた。言語活動では、「1番大変だと思う獣医さんの仕事」を選択し、自分の知識や経験を結びつけて理由を説明する活動を行った。

「馬のおもちゃの作り方」では、「まずは」「次に」や「一つ目は」など、順序を表す言葉を使って話したり、書いたりする活動に取り組んできた。言語活動では、学習したことをもとに「〇〇の作り方」の説明書作りを行った。

「おにごっこ」では、筆者の書き方をもとに、「オリジナルおにごっこ」を班で協力して作り、プレゼンテーションする言語活動を行ってきた。

第三学年では、「文様」「こまを楽しむ」を学習した。これらの単元では、本文を「初め」「中」「終わり」といった順序に分け、初めには筆者の問いがあり、中には問いに対する答え、終わりには本文全体のまとめが書かれていると確認した。また、それぞれの段落の役割を理解し、話の中心や全体の構成を意識しながら文章を読み進めた。そして、「読み手」として筆者の書きぶりの工夫を見つけたり、批評的に読んだりしながら、説明文の書き方のコツを学んだ。さらに、言語活動では、「書き手」として、身近な遊び（折り紙・ボール遊び・トランプ）の楽しさを読者にどのように伝えるかを考えてきた。

また、本学級の児童は、今年度に入り、教師の話の聞き方だけでなく、友だちの発言や会話の聞き方についても学習してきた。本学級の子どもたちは、「あ」相手を見て、「い」いい姿勢で、「う」うなずきながら、「え」笑顔で、「お」終わりまできくことを合言葉として授業に取り組んでいる。特に、「う」うなずきながら、「え」笑顔に関しては、友だちの考えに共感したり、違いに気づいたりしたときに、「なるほど」「そういうことか」などといった反応が自然と出すことで学びがより深まると考える。「すがたをかえる大豆」では、言語活動（学んだことを生かし、説明文を書く活動）をはじめ、グループワークなどの活動でも、この反応がたくさん出るように促していく。

本単元の学習では、1・2年生と3年生1学期に学んできたことを活かしながら、事例の順序から筆者の意図を読み取っていく。「どうしてこの書き方にしたか。」「分かりやすいが、他に

も表現のしかたがあるのでは。」など、常に筆者の書き方と自分の考えを比較しながら学習を進めてほしい。そして、読み取ったことを自ら書く活動の際に活用できるようにしたい。

(2)教材観

本教材は、大豆やその加工食品について書かれたもので、それらは児童にも身近なものである。ただ、大豆の加工食品は、見ただけでは原料が大豆とは分からないものも多く、児童にとっては新鮮な驚きをもたらすと考えられる。それによって、自分の食生活や日本の食文化を見つめ直すことにつながり、食育という観点からも大切な題材である。

本文を読み進めていく中で、説明のしかたの工夫を理解し、それらを活用して、児童自身が人に伝えたいと思う食べ物について、説明する文章を書くことで力の定着を図ることができる教材である。

「すがたをかえる大豆」は、「初め」「中」「終わり」に分けられ、「中」には事例が列挙されている文章構成になっている。また、「すがたをかえる大豆」は、事例が順序立てて整理されている教材である。これまでに学習してきた「こまを楽しむ」と比較すると、「初め」の筆者の問いが書かれていない。このことについて着目し、考えさせることで、はじめの問いかけがなくても、話題を提示することで事例を順序立てて説明することができることに気づくことができる。さらに、「中」の事例の順序について考えさせることは、「次に」「さらに」といった接続語の理解や、筆者がこの事例の順番にしたことに迫ることができると思う。ここで学んだ説明のしかたの工夫を活かして、説明文を書く活動を行うことで、順序の大切さを学習する。

(3)指導観

今年度の研究テーマ「『問いづくり』からはじめる単元デザイン～一緒に考え、一緒に学ぶ～」の実現のため、3年2組では、「対話」を大切にしてきた。自己との対話、筆者との対話、仲間との対話を授業の中で行うことで、考えが形成され深まっていくと考える。対話を生み出すには子どもたちがそれぞれ考え方が違うことに気づく必要がある。子どもたちが考えをもち、そこから交流を始め、考えを深めていく。本単元でも「対話」の中で出てきたことをもとに、『問いづくり』を行う。

単元の言語活動としては、「すがたをかえる〇〇を書こう」を設定する。子どもたち自身が説明文を書くために、作品を読み進める中で書き方のコツを考え、言語活動に活かせるようにする。

まず、第一次で身近にある大豆製品について調べ、作り方などを知ることからはじめる。本文に「ほとんど毎日口にしている」と書かれてあるが、実際に調べることで、事例として挙げられている食品や知っている食品以外にもまだまだ身近にあることに気づかせたい。

第二次では、「一番すがたを変えているランキング」を考えることで、自分の考えをつくってから交流し、仲間との考えの違いに気づいていく。子どもたちは、ランキングをつくることによって、自然と事例を把握することになる。また、すべての事例が「すがたをかえている」ので、どの順番に並べてみても不正解はなく安心して考えが表明でき、自分の解釈を根拠や理由とともに述べることができる。はじめから「筆者の工夫をみつけよう」では、受け身になってしまうが、ここで形成された考えをもって、筆者の意図を読むことで、筆者との対話が生まれてくる。その

結果、「どうして、筆者はこの順番にしたのだろうか？」という「問い」が生まれてくる。本時では、その「問い」をもとに、筆者の事例の順序性について予想する。予想する際、これまでに学んだ説明文の順序はどうだったのか確認することで、これまでの学習をもとに筆者の意図に迫る。その後、交流を重ねていく中で筆者の意図（順序性・筆者の伝えたいこと・題名）に迫っていく。

さらに、「そのほかの事例ではどうか」という課題も設定する。初発の段階で身近にある大豆製品に目を向け、本文には出てきていないが、子どもたちになじみのある食品や最近広まってきた食品を、「本文に入れるとしたらどこに入れるか」を考えることで、事例の順序性だけでなく、事例のとりあげ方の学習に展開できる。読み手の立場から書き手の立場で考えることで、単元の最後の書く活動に繋げていく。

単元の最後に、読み手の立場、書き手の立場の双方で考えたことを活かして「すがたをかえる〇〇」の活動を行う。自分が伝えたいことは何か、どういう順序で書けばよいか、読者がより分かりやすくなるためにはどのような工夫をすればよいかを考えながら、それぞれの説明文を書き上げることをめざす。

9. 単元の指導と評価の計画（全13時間）◎…記録に残す評価 ○…指導に生かす評価

次	時	主な学習活動	知技	思判表	主体	評価規準・評価方法
1	1	・教材文「すがたをかえる大豆」の初発の感想を書く。		○	○	本文を読んで、自分の考えとその理由を書くことができる。 【思・判・表①】 〈行動観察・ノート〉
	2	・初発の感想を共有し、考えを深める。また、単元のゴール「すがたをかえる〇〇を書こう」を知る。	○			幅広く読書に親しみ、読書が必要な知識や情報を得ることに役立つことに気づいている。【知・技②】 〈行動観察・ノート〉
	3	・語句の確認をし、身近にある大豆製品について詳しく調べる。	○		○	・比較や分類のしかた、辞書の使い方を理解し使うことができる。 【知・技①】〈行動観察・ノート〉
2	4	・文章全体の組み立てを捉え、文章の説明に合った問いをつくる。（こまを楽しむの文章全体の組み立てと比べ考える。）		○		・筆者の意図を読み取り、自分の考えをつくることができる。 【思・判・表②】 〈行動観察・ノート〉
	5	・教材文を読み「すがた	○	○		・筆者の意図を読み取り、自分の

		をかえているランキング」を作り、そのランキングにした理由をノートにまとめる。				考えをつくることができる。 【思・判・表②】 〈行動観察・ノート〉
	6	・ランキング表をもとに交流し、筆者の意図（順序性）を考える。 【本時】		○		・筆者の意図を読み取り、自分の考えをつくることができる。 ・自分の考えを友だちに伝えようとしている。【思・判・表②】〈行動観察・ノート〉
	7	・筆者の意図（順序性・筆者の伝えたいこと・題名）を読み取り、自分の考えを持つ。		◎		・筆者の意図を読み取り、自分の考えをつくることができる。 【思・判・表②】 〈行動観察・ノート〉
	8	・「身近にある大豆製品を教材文に入れるとしたらどの段落に入るか」を考え交流する。		○		・書き手としての考えをもつことができる。 【思・判・表③】 〈行動観察・ノート〉
3	9 ～ 13	・「すがたをかえる○ ○」を書き、交流する。	◎	◎	◎	・自ら題材を選び、学習したことを基に工夫して文章を書くことができる。 【知・技①②】【思・判・表①③】【主】〈行動観察・ノート〉

10. 本時の展開(6/13時間目)

(1) 本時の目標

「一番すがたを変えているランキング」をもとに交流する中で事例の順序の大切さや筆者の意図に気づくことができる。

(2) 本時の評価規準

「一番すがたを変えているランキング」をもとに交流し、筆者の意図や伝えたいことについて気づこうとしている。【思・判・表②】

(3) 展開

主な学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法
1. 前時の学習を振り返る。		
筆者の考えを読み取ろう！（中級編）		
2. 友だちのランキング表と自分のランキング表を見比べる。	・ランキング表を見比べて違いがあることに気づかせる。	
3. グループでなぜこのランキング表にしたのか交流する。	・友だちの考えを聞き、自分の考えを深める。	
4. 交流したことをクラスで共有する。	・自分の考えだけでなく、友だちの考えから気づいたことも発言できるようにする。	
（問い） どうして、筆者はこの順番にしたのだろうか？		
5. 交流して考えたことや、これまでに学んだ説明文（たんぽぽのちえやこまを楽しむ）を読み返して、筆者の意図（順序性）を考える。	・どうして、筆者がこの順序にした理由に注目し、これまでの学習をもとに考えさせる。	
6. 考えたことをノートにまとめる。	・考えたことをノートにまとめさせる。	【思・判・表②】 （行動観察・ノート）

(4) 本時の判断基準

本時における具体的な児童の状況（※本時の評価基準にかかわる場面において）

おおむね満足できる状況(B)	努力を要する状況(C)への支援
順序性を理解し、根拠をもって自分の考えをもっている。	筆者の順序性を確認し、自分の考えとの違いに着目するように促す。